

群馬をめぐる

gunma

2026.6発行

vol.1

CIR（国際交流員）による群馬県
の魅力発信ニュースレター



縁起だるまは、日本全国で親しまれている日本文化を象徴する存在です。
群馬県は日本一のだるま生産地として全国にその名を誇っています。



少林山達磨寺

縁起だるま発祥の地

少林山達磨寺は、日本・群馬県高崎市にある寺院です。1697年に創建され、日本文化を象徴する存在のひとつ「縁起だるま」発祥の地として知られています。また、毎年新年に行われる「だるま供養」の行事でも広く知られ、多くの参拝客が訪れます。

だるまは、日本の伝統的な縁起物で、木や紙で作られることが多く、中国禅宗の開祖である達磨大師をモデルにしています。

だるまは、購入した時点では目が描かれておらず、願いを込めて自分で目を入れるのが特徴です。最初の片目を描く際に目標や願い事を定め、その願いが叶った時にもう片方の目を描き入れます。だるまを見るたびに自分の目標を思い出し、その達成に向けて努力を重ねるといふ思いが込められています。

また、だるまは「倒れても起き上がる」縁起物としても知られています。押して倒しても、丸みを帯びた独特の構造によってすぐに起き上がることから、日本のことわざ「七転び八起き」に象徴される、「どんな困難に直面しても諦めず、何度でも立ち上がる精神」を表しているとされています。

だるまの起源には諸説ありますが、その一つとして知られているのが、1780年代の天明の大飢饉にまつわる話です。当時、困窮する農民を救うため、少林山達磨寺の住職が心越禅師の描いた達磨図をもとに木型を作らせ、人々にだるま作りを副業として勧めたとされています。これが、現在の高崎だるまの始まりになったとも言われています。

少林山達磨寺へは、車のほか、電車やバスなどの公共交通機関を利用して訪れることもできます。寺へ向かう道中では、橋や自動販売機など、さまざまな場所でだるまの存在を目にすることができ、街全体に“だるまの町”らしい雰囲気広がっています。そして、道路脇に人の背丈を超える大きな木製のだるまが見えてくると、そこが少林山達磨寺の総門の入口です。



総門をくぐると、本堂へ続く108段の石段が現れます。仏教では「108」は人間の煩惱の数を表すとされており、一段一段を踏みしめながら登ることで、心の迷いや煩悩を少しずつ払い落とし、本堂にたどり着く頃には心も清められるといわれています。

少林山達磨寺では、参拝やお線香をあげるほか、観音堂を訪れたり、招福の鐘を鳴らしたりすることができます。また、新たな目標への願いを込めてだるまを購入したり、幸運を願うだるまのお守りを手にするのも人気です。





だるま展示コーナー

少林山達磨寺を訪れた際は、だるまを購入するだけでなく、境内にある無料の展示コーナーにもぜひ立ち寄ってみてください。

展示コーナーは2階建てとなっており、1階では日本各地や海外のさまざまなだるまが紹介されています。展示室の入口では、日本地図とともに各地域を代表するだるまが描かれた大きな壁面展示が来場者を迎えます。中でも、私たちが土産店やSNSなどでよく目にするだるまが、群馬県の「高崎だるま」です。

だるまは地域ごとに特徴が異なります。例えば、新潟県のだるまは一般的な丸い形ではなく三角形に近い独特な形をしており、兵庫県のだるまは、通常の厳しい表情とは異なり、歯を見せて笑う明るい表情が特徴です。

また、館内では面白いデザインのだるまに出会えるのも魅力のひとつです。

館内では、ドラえもんをモチーフにしただるまや、群馬県警のパトカーをイメージしただるまなど、時代の流行を取り入れたユニークなトレンドだるまも展示されています。さらに、だるまは縁起物の人形としてだけでなく、茶碗や箸、陶器など、日常生活のさまざまな雑貨のデザインにも取り入れられており、日本文化に深く根付いていることが感じられます。また、インドのモディ首相が訪日時に高崎だるまとともに撮影した記念写真も展示されています。こうした展示からも、だるまが日本を代表する文化的シンボルとして、文化外交の場面でも重要な役割を果たしていることがうかがえます。

2階では、ドイツ人建築家ブルーノ・タウトに関する展示があります。展示を見学し、関連資料に触れることで、彼とこの寺との不思議な縁や深いつながりを感じ取ることができます。



竹田姫だるま（大分県）



群馬県警だるま
JR東日本電車だるま



ドラえもんのだるま



群馬県 日本一のだるま生産量を誇る

群馬県は、日本一のだるま生産地として知られています。県内には約50のだるま製造業者があり、毎年およそ90万個ものだるまが生産され、日本国内に流通するだるまの多くを占めています。私たちが土産店やインターネットなどでよく目にするだるまの多くが「高崎だるま」であるのも、そのためです。

伝統的な高崎だるまは丸みのある形が特徴で、眉毛は「鶴」、鼻から口ヒゲは「亀」であり、長寿や繁栄への願いが込められています。胴体には「福」など縁起の良い文字が描かれ、顔の両側には「商売繁盛」といった願い事が金色の文字で書かれていることが多く、日本らしい縁起文化を感じさせます。

大門屋 伝統を受け継ぐ

大門屋は、だるまのふるさと大門屋は創業100年を誇る老舗です。国道18号沿いに構える工房兼店舗は、業界最大級の約500㎡の広さを誇ります。年間およそ7万個のだるまを生産しており、黄綬褒章受章職人が守る伝統工芸品から四季折々の最新デザインまで種類豊富に手掛けています。

大門屋を訪れると、まず目を引くのは、赤く塗られただるまが庭先に並べられ、天日干しされている風景です。また、店舗の至るところに達磨大師の姿が見られ、だるま文化がこの場所に深く根付いていることを感じさせます。

特に店内では、高さ50cmを超える100個以上のだるまが整然と並べられており、まるで訪れた人々を迎え入れているかのような迫力ある光景が広がっています。



高崎だるまの作り方

店内には、だるまの作り方が分かる各工程のだるまが展示されているほか、最新の技術を使って高崎だるまの紹介をするプロジェクションマッピングを店内にて見ることができます。

大門屋では成型とヘッタと呼ばれる底の部分にくっつける所から作業を行っています。成型は紙からできており、かつては手作業で、だるまの木型に一枚一枚、材料の紙を張っていました。

木型全体に張り終わったら天日乾燥させ、その後だるまの背を割って、中の木型を取り出し、切れ目を張り合わせるといった手間のかかる作業でした。

現在では真空成形などの工業的な技術が導入され、より効率的に大量生産が行われています。

だるまの底にはヘッタとよばれるおもりをつけ、「起き上がり小法師」と同様に、倒しても自分で起き上がる機能を持たせます。

つぎは着色です。まずは下塗りとして、だるま全体に胡粉（貝を焼いて作られた白い粉）を塗り、その後赤色を重ねます。昔、職人は一本一本の筆を使って丁寧に塗りました。現在では、だるまを塗料の中に直接浸して着色し、その後乾燥させる方法が用いられています。

その後、顔描きです。以下の写真に写っているのは、金色の装飾までが施された段階のものです。完成させるためには、職人が眉毛やヒゲを描き入れ、「福」や「家内安全」「商売繁盛」などの縁起の良い文字を書き加えていきます。

この作業だけは、昔も今も変わらず手作業で行われています。職人たちは筆を使い、一筆一筆丁寧に描きながら、だるまに命を吹き込むように完成へと導いていきます。



だるま絵付け体験



現在、大門屋では、だるまの絵付け体験や、だるま手形・足形つけ体験が用意されています。体験に参加するには、事前に大門屋の公式サイトから予約または問い合わせを行い、自分だけのオリジナルだるま作りに挑戦することができます。

大門屋に到着したら、まずは10種類以上あるだるまの中から好みのデザインを選びます。定番の赤い伝統的なだるまはもちろん、夜桜をモチーフにしたデザインだるまなど、個性豊かなオリジナルだるまも用意されています。

その後、だるまの材料や作り方を紹介する映像を鑑賞します。映像を通して、だるまがどのように作られているのかを知ることができるだけでなく、高崎だるまならではの特徴や魅力、そして長い歴史についても理解を深めることができます。

実際にだるまへ絵付けを行う前には、まず紙の上で眉やヒゲを描く練習をします。スタッフや職人が筆の持ち方や使い方を丁寧に教えてくれるため、初心者でも安心して体験することができます。

紹介したように、だるまの眉毛とヒゲは、それぞれ鶴と亀を表現したデザインになっています。そのため、鶴や亀の形を表現するためには、細く力強い筆使いで一気に線を描く必要があります。しかし、筆に慣れていない人にとっては、思った以上に難しく感じられるかもしれません。



紙での練習を終えた後はいよいよ、自分で選んだだるまへの絵付けに挑戦します。作業の際には、スタッフが見本となるだるまを目の前に置いてくれるため、それを参考にしながら描き進めることができます。

しかし、事前に紙で練習していたとしても、実際にだるまへ直接描く作業は決して簡単ではありません。だるまの表面には独特の丸みや傾斜があり、平らな紙に描くのとはまったく感覚が異なります。手を固定できる場所が少ないため、筆先を安定させるだけでも難しく感じられます。

さらに、筆に込める力加減や墨の量も非常に重要です。力が強すぎたり墨が多すぎたりすると、鶴や亀を表した繊細な線が潰れてしまい、高崎だるま特有の表情をきれいに描き出すことが難しくなります。

絵付けが完成した後は、乾燥のためにだるまをスタッフへ預けます。乾燥を待つ間は、大門屋をゆっくり見学することができます。館内にはさまざまな種類のだるまが展示されており、それぞれに説明も添えられているため、だるま文化への理解をさらに深めることができます。

また、+550円でお背中に職人による文字入れも可能です。お名前やお願い事など自分だけの特別なだるまを作ることができます。完成しただるまを持ち帰ったら、ぜひ片目を描き入れ、自分自身の願いや目標を込めてみてください。

そして、その目標に向かって努力を重ねながら、もう片方の目を描き入れる日を目指してみてください。

さらに大門屋では、だるまに足形や手形をつける体験も行われています。小さな子どもの成長記録や、家族の大切な思い出を形として残せることから、家族連れにも人気の体験となっています。



楽歩堂前橋公園

前橋市は、群馬県の県庁所在地であり、豊かな自然に恵まれた街として知られています。前橋市は、赤城山の千本桜や敷島公園など、多くの桜の名所があります。

その中でも、「楽歩堂前橋公園」はアクセスの良さから、多くの人々に親しまれている花見スポットのひとつです。公園は群馬県庁のすぐ隣に位置し、前橋駅からは路線バスでアクセスすることができます。住宅街に囲まれた立地のため、自然を感じながらも安心して散策できる点も魅力です。

また、この公園の大きな見どころとなっているのが、数百の桜です。毎年3月下旬から4月上旬にかけて、園内では数百本もの桜が一斉に咲き誇り、公園全体が淡い桜色に包まれる美しい景色が広がります。

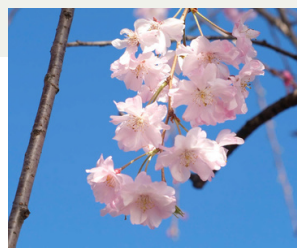


公園内には主にソメイヨシノが植えられており、日本で最も親しまれている桜として知られています。五枚の花びらと淡い白桃色が特徴で、花が散る際には花びらが一枚ずつ舞い落ち、まるで雪が降るかのような幻想的な風景を生み出します。

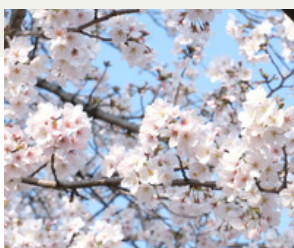
また、本数は多くないものの、枝垂れ桜も見ることができます。しなやかに垂れ下がる枝に咲く淡いピンク色の花々は、まるで滝のように美しく、公園に優雅な雰囲気を与えています。

公園からは群馬県庁をはじめ、赤城山や浅間山など群馬を代表する山々を望むことができます。園内には池や日本庭園風の景観も整備されており、訪れる人々はさまざまな景色を楽しみながら花見を満喫できます。

特に夕暮れ時は、公園を訪れるのにおすすめの時間帯です。夕陽に照らされた桜並木は鮮やかな桃色に染まり、昼間とは異なる幻想的な表情を見せてくれます。さらに、桜の開花期間中には夜間ライトアップも実施され、夜空に浮かび上がる白い桜と、水面に映るその姿が、絶美の風景を演出します。



枝垂れ桜



ソメイヨシノ



楽歩堂前橋公園 群馬県前橋市

桜祭り

毎年春になると、楽歩堂前橋公園では、桜の開花時期に合わせて約3週間にわたる桜まつりが開催されます。

会場には多くのキッチンカーや屋台が立ち並び、日本らしい賑やかで華やかな祭りの雰囲気に包まれます。満開の桜の下を散策しながら、熱々の焼きそばやたこ焼き、たい焼きといった定番グルメに加え、スイーツや冷たい飲み物などを楽しむことができます。

花見シーズンには多くの人々が訪れますが、公園全体にはどこかゆったりとした空気が流れており、桜の木の下で思い思いの時間を

過ごすことができます。

レジャーシートを広げ、食べ物を持ち寄って、家族や友人、ペットとともに話しながら桜を眺める人々の姿は、日本の春ならではの風景です。

ただし、訪れる前には桜の開花状況を事前に確認しておくのがおすすめです。満開のタイミングに合わせて訪れることで、より美しい春の景色を堪能することができます。